中井敏夫 作品集

中井敏夫 作品集

中井敏夫君のこと　―作品集に寄せて―

今井　凌雪

私が東京教育大学で教えるようになったのは昭和四十六年のことであるが、すでにその当時、中井敏夫君は書専攻の学生として勉学に励んでいた。中国の古代文字、とりわけ甲骨文に興味を持っていたようで、この方面の研究を進めており、書の作品も、古代文字を扱った自由で力強い筆遣いのものが多かったことを覚えている。

高校の教師として教鞭を執っていた中井君が、私の主宰する雪心会に入会したのは、彼が書専攻の後輩の鈴木陽子さんと結婚することになり、その仲人を私が引き受けた、確かその前後のことであったと記憶する。そして、その頃にはすでに彼独特の書風ができあがっていたようだ。

中井君はその後も雪心会の会員として活動したが、作風にはきわめて独自なものがあり、公募展への出品の際も、安易に他人の風を真似るようなことは一切しなかった。いかにも強い信念を持った彼らしい態度であった。

東京の有楽町で毎年開いていた後輩たちとのグループ展「書索展」には、私自身何度も足を運んだことがある。毎回書の作品だけではなく篆刻の作品も発表していたが、これにも彼らしさが滲んでいた。

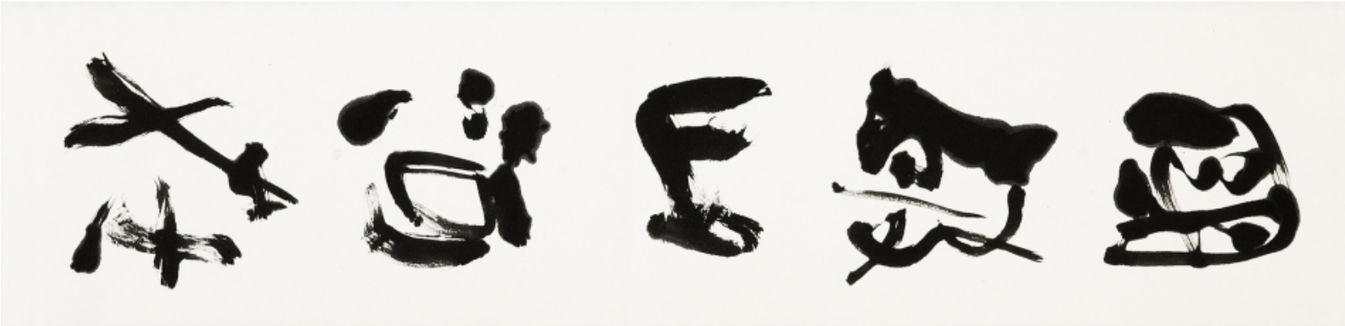
中井君が帰らぬ人となって一年以上になるという。後輩たちが協力して作品集を編むことになったが、作品集にのせる数々の作品を見ていると、若いときの作品から終始一貫して、独自の運筆と造形の妙が活きていることを改めて感ずる。やや荒削りの面もあるが、小さな技法にこだわらない高く抜き出た大胆剛毅な作風は彼ならではのものといえる。

作品集の中の一点一点の作品からは、彼の気骨のようなものすら感じられる。同時に、闊達で率直だった彼の性格が思い起こされ、その面影が彷彿としてくる。中井君を偲ぶ上で、この作品集が果たす役割は決して小さくないであろう。

【→】ｗｏｒｋｓ×ｗｏｒｋｓ×ｗｏｒｋｓ

【2】 52cm × 45cm

【3】 52cm × 45cm



【4】 45cm × 45cm × 52

【5】230×80

【6】135×35

【7】135×35

【8】70 x 135

【9】230x80

【10】135×18×2

【11】70×67

【12】50×170

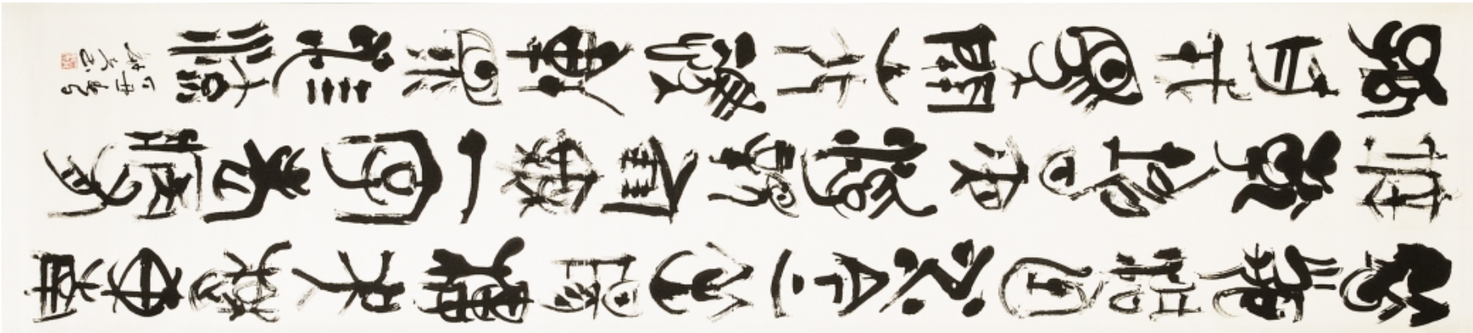
【13】 35 x 135

【14】 50 x 170

【15】 230×50

【16】 ５３０×３７０

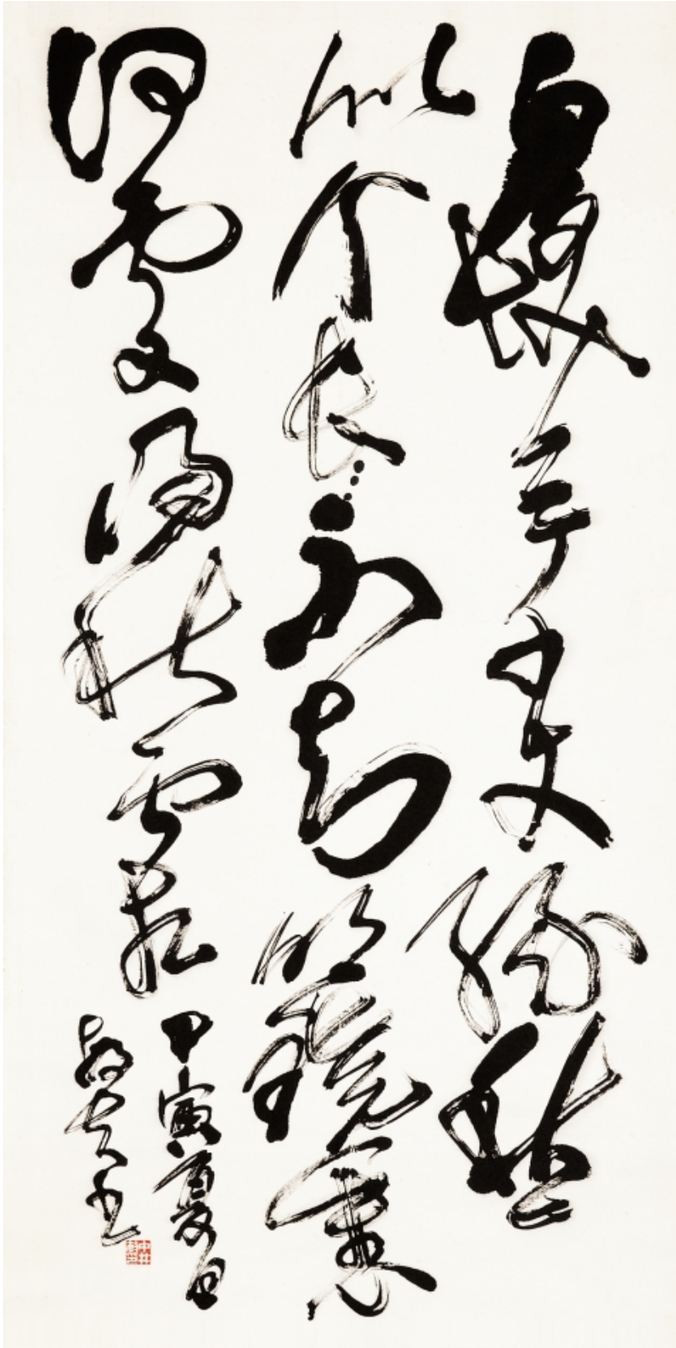
【17】 ５３０×３７０



【18】 ５３０×３７０

【19】 ５３０×３７０

【20】170×50



【21】135×70

【22】一三五×一〇×二

【23】一三五×一〇×二

【24】７０x６７

【25】５０x １７０

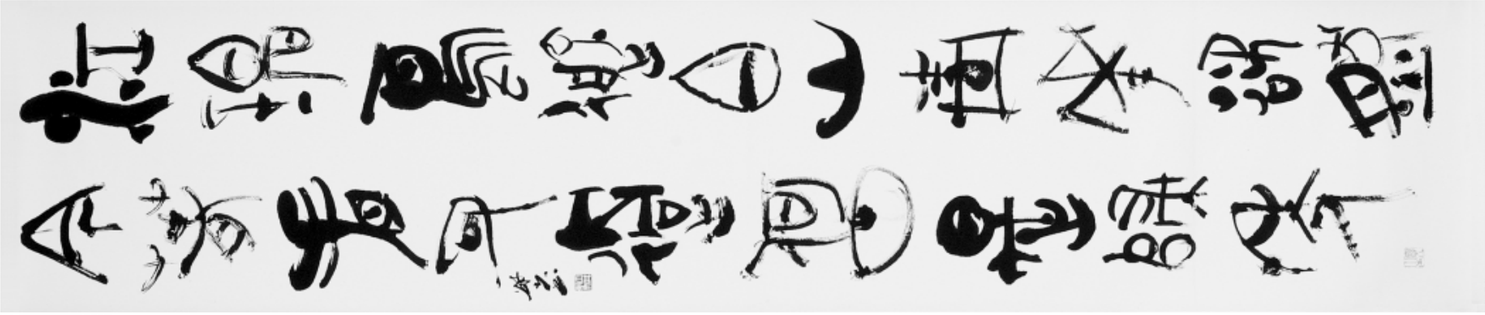
【26】１３５x３５x２

【27】230×80

【28】70×67

【29】50×170

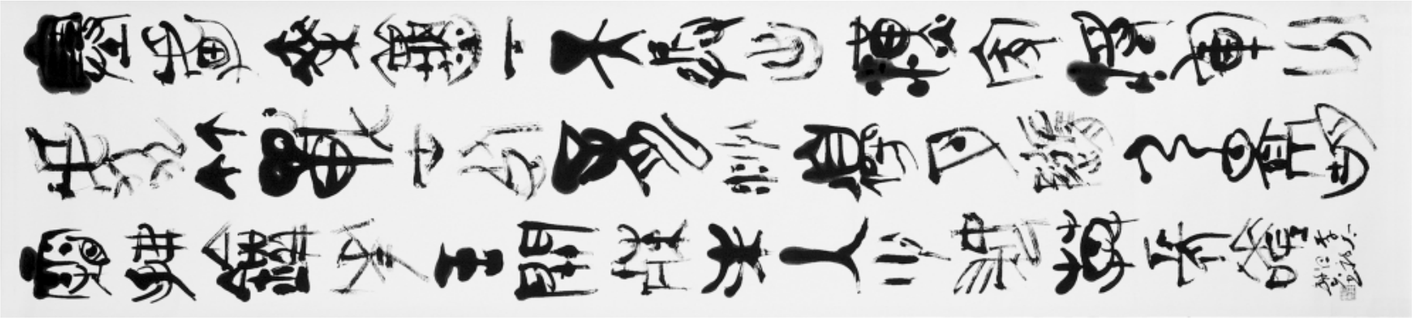
【30】一三五×一〇〇



【31】二三〇×五〇

【32】二三〇×五〇

【33】 270×540



【34】 270×540

【35】 270×540

【36】 270×540

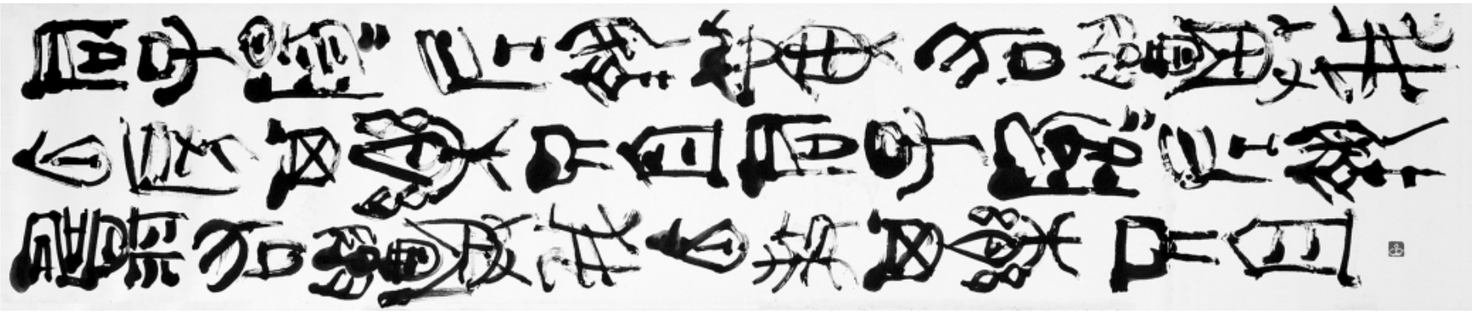
【37】135x35

【38】170x50

【39】48x49

【40】35 x 135

【41】 ２３０×５０

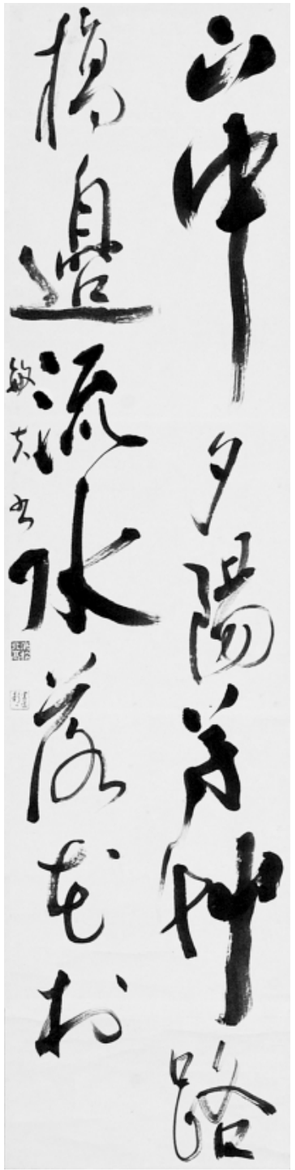


【42】 ２３０×５０

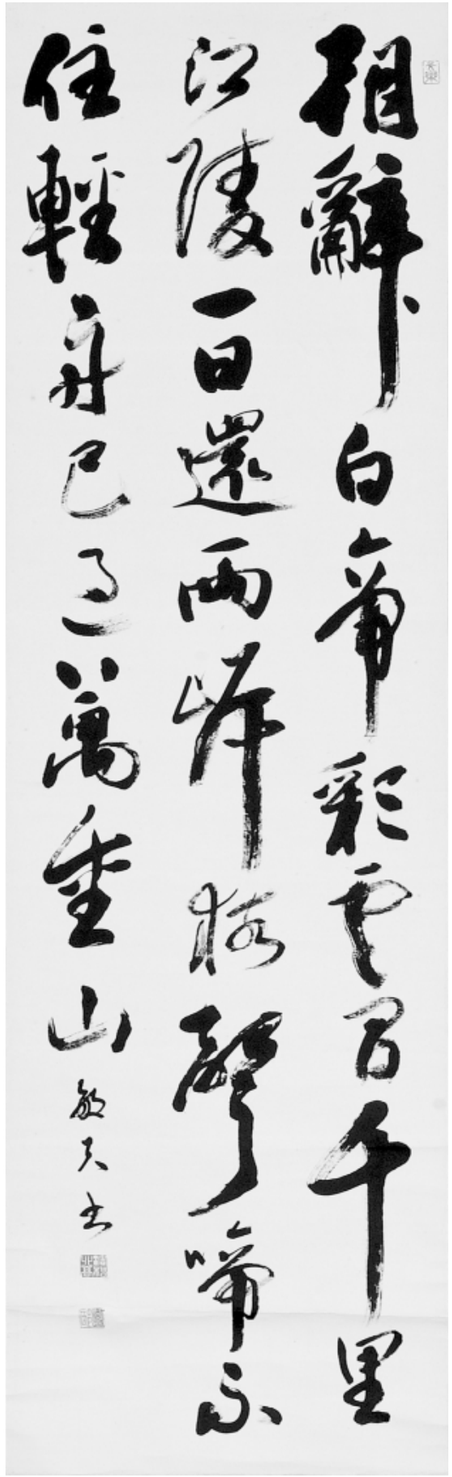
【43】 ２３０×５０

【44】 ２３０×５０

【45】230×50



【46】96×23



【47】135×45

善居室

華下忘歸

愛其靜

語海軒

愛幽棲

一連托生

雕琢復朴

無夕不飲

無畏施

顧影独盡

静居燕坐

獻嘉觴

有教無類

魯酒齊歌

宮德深遠

聲入井桐

飛鳥盡良弓藏

翰逸神飛

正聲感人

春華秋實

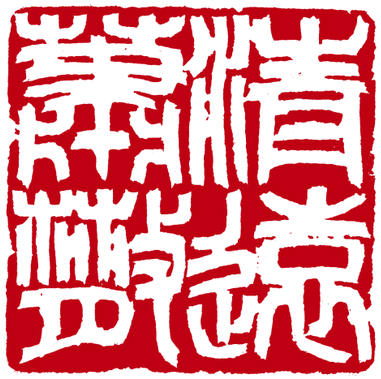
偶然欲書

據于德

白沙翠竹

虛靜恬淡

窮盡要妙



清遠蕭散

天地一沙鷗

酌彼金罍

西形感類

擊鼓其鏜

靜中樂事

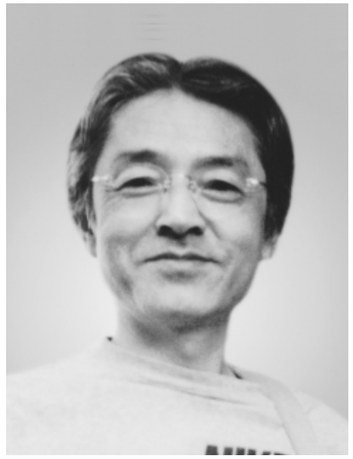
韜光養德

書作品 目録

●篆刻作品については年代順とはせず、代表作32点を選び、印影の左に釈文を付した。

【作品番号】	釈文	作品寸法（㎝）	制作年	出品展覧会名
【1】	悲風生微綃、萬里有古色。（杜甫）	135×35×2	2003(平15)	第十八回書索展
【2】	陟彼高岡、我馬玄黄。(我)姑酌彼兕觵、維以不永傷。(詩経)	230×50	2001(平13)	第三十八回雪心会展
【3】	日日採蓮去、洲長多暮歸。弄篙莫濺水、畏濕紅蓮衣。（王維）	230×50	2001(平13)	市川市展
【4】	国破山河在、城春草木深。（杜甫）	135×35×2	1999(平11)	第十四回書索展
【5】	殷其雷、在南山之陽。何斯違斯、莫敢或遑。振(振)君子、歸哉歸哉。(詩経)	230×80	1999(平11)	第二十七回雪心会選抜展
【6】	伯牙鼓琴 （荀子）	135×35	1995(平7)	第十回書索展
【7】	月下獨酌 （李白）	70×135	1997(平9)	第十二回書索展
【8】	甄陶 （法言）	230×80	1996(平8)	第二十四回雪心会選抜展
【9】	蘭陵美酒鬱金香、玉椀盛来琥珀光。但使主人能酔客、不知何処是故郷。(李白)	135×18×2		十篆会展
【10】	魚戯新荷動、鳥散餘華落。	70×67	1995(平7)	第十回書索展
【11】	三日不飲酒、覺形神不復相親。（王忱）	50×170	1991(平3)	第六回書索展
【12】	流魚出聴	35×135	1993(平5)	第八回書索展
【13】	春華秋實	50×170	1987(昭62)	第三回書索展
【14】	幽意閑情	230×50	1990(平2)	第五回書索展
【15】	意渉瓌奇			
【16】	玉階生白露、夜久侵羅韈。却下水清簾、玲瓏望秋月。（李白）	230×50		雪心会展
【17】	陟彼高岡、我馬玄黄。我姑酌彼兕觵、維以不永傷。(詩経)	230×50	1990(平2)	第二十七回雪心会展
【18】	昔間洞庭水、今上岳陽楼。呉楚東南坼、乾坤日夜浮。親朋無一字、老病有孤舟。戎馬関山北、憑軒涕泗流。（杜甫）	230×50		日本書芸院展
【19】	蜉蝣之羽、衣裳楚楚。心之憂矣、於我歸處。(詩経)	230×50	1985(昭60)	第十三回雪心会選抜展
【20】	桃之夭夭、灼灼其華。之子于歸、宜其室家。(詩経)	170×50	1985(昭60)	第一回書索展
【21】	白髪三千丈、縁愁似箇長。不知明鏡裏、何処得秋霜。（李白）	135×70	1974(昭49)	大学時代
【22】	浮雲遊子意、落日故人情。（李白）	135×18×2		
【23】	魚戯新荷動、鳥散餘華落。	135×18×2		
【24】	野毎春其必華、草無朝而遺露。（陸機）	70×67	2001(平13)	第十六回書索展

【25】	五十而知天命 （論語）	50×170	2000(平12)	第十五回書索展
【26】	竹憐新雨後、山愛夕陽時。	135×35×2	2000(平12)	第十五回書索展
【27】	出其東門、有女如雲。雖則如雲、匪我思存。縞衣綦巾、聊樂我員。(詩経)	230×80	2000(平12)	第二十八回雪心会選抜展
【28】	有匪君子、如切如磋、如琢如磨。(詩経)	70×67	1999(平11)	第十四回書索展
【29】	華竹有和氣 （黄山谷）	50×170	1998(平10)	第十三回書索展
【30】	揭諦揭諦、波羅揭諦、波羅僧揭諦、菩提薩婆訶。（般若波羅密多咒）	135×70	1995(平7)	第十回書索展
【31】	江碧鳥逾白、山青花欲然。今春看又過、何日是歸年。（杜甫）	230×50	1995(平7)	第三十二回雪心会展
【32】	松下問童子、言師採薬去。只在此山中、雲深不知處。（賈島）	230×50		雪心会選抜展
【33】	青山横北郭、白水遶東城。此地一為別、孤蓬万里征。浮雲遊子意、落日故人情。揮手自茲去、蕭蕭班馬鳴。（李白）	230×50		日本書芸院展
【34】	塞虜乗秋下、天兵出漢家。將軍分虎竹、戰士臥龍沙。邊月隨弓影、胡霜拂劒花。玉關殊未入、少婦莫長嗟。（李白）	230×50		日本書芸院展
【35】	撃鼓其鏜、踊躍用兵。土國城漕、我独南行。(詩経)	230×50	1991(平3)	第十九回雪心会選抜展
【36】	魴魚赬尾、王室如燬。雖則如燬、父母孔邇。(詩経)	230×50		市川市展
【37】	異路同帰	135×35	1991(平3)	同木展
【38】	夔憐蚿 （荘子）	170×50	1990(平2)	第五回書索展
【39】	斷	48×49	1990(平2)	第五回書索展
【40】	衡門棲遅	35×135	1986(昭61)	第二回書索展
【41】	独在異郷為異客、毎逢佳節倍思親。遥知兄弟登高処、遍挿茱萸少一人。（王維）	230×50	1988(昭63)	読売書法展
【42】	君子陽陽、左執簧。右招我由房、其樂只且。君子陶陶、左執翿、右招我由敖、其樂只且。(詩経)	230×50		
【43】	采采卷耳、不盈頃筐。嗟我懐人、置彼周行。(詩経)	230×50	1987(昭62)	日本書芸院展
【44】	東門之墠、茹藘在阪。其室則邇、其人甚遠。東門之栗、有踐家室。豈不爾思、子不我即。(詩経)	230×50	1987(昭62)	第三回書索展
【45】	誰謂河廣、一葦杭之。誰謂宋遠、跂予望之。誰謂河廣、曾不容刀。誰謂宋遠、曾不崇朝。(詩経)	230×50	1985(昭60)	読売書法展
【46】	山中夕陽芳草路、橋辺流水落花村。	96×223	1966(昭41)	日本書芸院展
【47】	朝辭白帝彩雲間、千里江陵一日還。兩岸猿聲啼不住、輕舟已過萬重山。（李白）	135×45	1967(昭42)	高校時代



経歴

一九四九年（昭和２４年）　静岡県浜松市に生れる